

資 料

クリティーク

「批判」の意味——「論文クリティークとは何か」を考える一手段として——

水寄知子¹⁾, 江藤裕之¹⁾

【要 旨】 本稿の目的は、看護研究の基礎と方法を教授する過程において重視されている「論文クリティーク」に注目し、「批判^{クリティーク}」という言葉の意味について論ずることである。まず、研究論文の評価あるいは論文クリティークについて、看護研究の教科書に記述されている内容を概観する。そして、研究論文の構成要素ごとに評価基準をチェックリストのように用いてその価値を判断することが、論文クリティークなのだろうかという問題提起をする。その上で「批判」の辞書意味を明らかにし、看護学において「批判」という言葉はどのように用いられているか、さらに教育学と哲学における「批判」の概念について述べる。「批判」の意味に関して本稿では、批判とは単に対象の欠点を指摘したり、長所と短所を区別してその是非を判断したりすることではなく、あらゆる側面から対象全体を理解するように努め、そこからよりよいものを選び抜く営みであると主張したい。

【キーワード】 論文クリティーク, 批判, 看護研究, 研究論文の評価

はじめに

看護研究法の教授は、看護教育課程において重視されている。なぜなら、看護の質を高めるには、看護師ひとりひとりが看護研究の目的や意義、また研究のプロセスと方法を理解し、実際に研究を行える能力を身につけることが必要だからである。そして、看護研究の基礎と方法を学び、それぞれの場で看護研究を進めていくためには、既にどのような研究が行われているのかを知るだけでなく、その先行研究に学ぶことが必要不可欠である。そこで注目されるのが、いわゆる論文クリティークであろう。

ある一つの研究だけが、看護の現場で起きている問題を解決する完璧な答え、すなわち実践に应用可能な知識を提供してくれるわけではない。看護実践における知識は、同じ課題の異なる研究を^{evaluation}評価することによって蓄積される。したがって、そのような研究報告^{research reports}を^{critique}批判できる読み手は、看護実践における知識の向上に資することができるのである (Polit and Hungler,

1999: p.623)。

では、研究報告あるいは論文を批判するとはどういうことか。そこで本稿では、看護研究の教科書における論文クリティークに関する記述を概観し、いわゆる論文クリティークと言ったときの「クリティーク (批判)」という言葉の意味について論ずる。

看護研究において論文クリティークは どのように行われているか

看護研究の教科書には必ず研究評価の章が設けられており、章の構成は大きく概論と各論に分けられている。まず冒頭で、研究論文を適切に評価することの重要性が述べられ、次いで論文クリティークとはどのようなもので、その目的は何かといった概論を取り上げている。しかし、概論の記述は章の始めのわずかな部分であり、研究評価の章の大半は論文クリティークの方法、枠組み、基準などの説明に費やされている (Burns and Grove, 1997; Polit and Hungler,

¹⁾ 長野県看護大学
2005年9月20日受付

1999; Wilson, 1989; Woods and Catanzaro, 1988). つまり、それぞれが提示する論文評価基準の具体的内容は異なるが、いずれも「クリティークとは何か」という理念よりも、評価の仕方といった技術的な側面を重視していると言える。

例えば *Nursing Research. Principles and Methods* には、まず論文クリティークの方法に関する7項目のガイドライン——1) 研究論文の長所・短所をバランスよく見ること、2) 研究論文の長所・短所は具体的に評価すること、3) 論拠のある批判をすること、4) 客観的であること、5) 否定的なコメントには注意すること、6) 問題を指摘するだけでなく、解決法やヒントを提示すること、7) 研究論文のあらゆる側面を評価しなければならない——が掲げられている。

続いて、研究論文の構成要素別評価のガイドラインが示される。例えば、研究課題の項では、その研究課題は看護専門職者にとって意義のあるものか、研究課題は研究しようとするパラダイムに合致しているか、研究目的や主要な概念が明確に記述されているか、などである。次に、文献検討の項、理論的概念枠組みの項、量的・質的研究の研究デザインならびに研究対象の項について、それぞれのガイドラインが示されている。研究デザインや研究の手順、サンプリング、データ収集の方法、測定用具等に関しては、研究論文の構成要素としても細分化されており、そこでの評価のガイドラインも詳細に示されている。それは、あらゆる側面で科学的根拠が求められる研究論文のクリティークの中心は、その研究課題の解決に用いた方略や手順の分析にあると認識されているからであろう。

後半は、データの分析方法、研究結果、結果の解釈・考察、倫理的側面について、分析方法は適切か、結果の提示に偏りはなにか、解釈は結果と一致しているかなど、それぞれの構成要素を評価するためのガイドラインが細かく提示されている。

このように看護研究における論文クリティークは、研究論文を構成要素に分け、記述された内容を構成要素別のガイドラインに沿って読み、その基準を満たしているかどうかを判定することに重点が置かれている。そして、基準を満たしていれば優れた有意義な研究であり、その研究論文から得られた知見は、看護実践に

応用可能な知識として蓄積されていくということになる。確かにこのようなガイドラインは、論文クリティークを行うときのチェックリストとして役立つのみならず、自らが研究を進める際にも非常に有用であろう。なぜなら、予め評価のガイドラインに沿って研究を進め、その基準を満たすようにすれば、自ずと看護実践に応用可能な知見が導き出せる価値のある研究と判断されることになるからである。

しかし、研究論文をチェックリストに沿って読み、その基準を満たしているかを判定することが、研究論文を批判すること、すなわち論文クリティークなのだろうか。論文が備えるべき構成要素や評価のガイドラインの信頼性や妥当性を否定するものではない。しかし、論文クリティークとは、既存の研究から引き出された知識が、看護実践に応用できるかどうかを判定するためだけに行われるものではなく、自他の研究論文を「批判」することによって、後に続く研究の質が向上することを期待して行うべきものなのではないだろうか。なぜなら、研究論文そのものの質を高めることが、延いては看護実践に応用可能な知識を蓄積することにつながると考えるからである。そこで、論文クリティークの目的や意義を考える前段階として、^{クリティーク}「批判」という言葉の意味を考えてみよう。

「批判」の辞書意味

改めて「批判」という言葉に注目してみると、「批判」という言葉がもつイメージは浮かんできても、それがいかなることを指し示しているのか、すなわち「批判」の意味を明確に言語化することは難しい。

そこで、言葉の意味を知るために一般的に行われている手段、すなわち辞書を引くという方法で「批判」の辞書意味を明らかにする。本稿では『日本国語大辞典』（小学館）と『大漢和辞典』（大修館書店）を用いて、「批判」の辞書意味を見てみるが、その前に、日本語では「批判」と訳される英語の critique は元来どのような意味を有するのか見てみよう。

英語の critique (〔独〕Kritik, 〔仏〕critique) は、「判断能力のある」という意味のギリシア語 kritikos に由来し、さらに「見分ける、区別する、よりよいもの

を選び抜く」という意味のギリシア語の動詞krineinに遡る。つまり、critiqueとは「多くの中からよいもの、正しいもの、優れたものを選び抜く」というのが原義である(江藤, 2005: p.75)。

では、日本語の「批判」はどのような意味で用いられているだろうか。『日本国語大辞典』には、「批判」に関しては以下のように記述されている。

ひ・はん【批判】〔名〕①批評して判断すること。物事を判定・評価すること。[...]②裁判で判定・裁定すること。[...]③良し悪し、可否について論ずること。あげつらうこと。現在では、ふつう、否定的な意味で用いられる。[...]⑤哲学で、事物や学説の内容を根本的に研究して、その全体の連関、意味、基礎を明らかにすること。[...]

ここから「批判」は、批判の対象となる事物の良い点はどこで悪い点はどこなのかを決め、その価値を定めるという意味であることがわかる。しかし、日常生活の中で批判という言葉を目にしたとき、どうしてもそこに否定的なイメージがつきまとうのは、ある特定の事物や人物を取り囲み、その良し悪しについてあれやこれやと言いつける風景が思い浮かぶからだろう。あるいは、優位に立つ者から劣位の者に向かって、一方的に可否が言い渡される様子が、批判という言葉からは感じられる。

哲学でも「批判」なる語はよく使われるが、そこに否定的な意味はない。この概念が哲学で大きな意義を有するようになったのはImmanuel Kant以後である。Kant以前の18世紀のカトリック系の論理学者は、「批判」を、判断や定義の吟味、真偽の基準などを論ずることとした(『哲学・思想事典』)。つまり、哲学における批判とは、事物の価値を定めるのではなく、命題の真偽基準を吟味して事物の全体像を明らかにすること、すなわちその命題を成立させる根拠そのものを詳細に調べ、そこから命題の根拠たるよりよいものを選び出すことなのである。

次に『大漢和辞典』には、以下のように記述されている。

【批】[...]㊦うつ。手でうつ。[...]㊧おす。[...]㊨ふれる。[...]

㊩あらためる。ただし。[...]㊪たすける。[...]㊫しめす。しるしをうつ。[...]㊬しなさだめ。評する。[...]

【批判】[...]㊭宰相が臣下の奏状に意見を加へること。[...]㊮是非をわかち定める。

【批評】[...]物事の是非善悪を論じて品をつけること。しなさだめ。品評。

漢語の「批」「批判」と、日本語の「批判」との特徴的な違いは、前者の第一義が、意見を加えて改善することにあると言える。「事物の全体像を明らかにすること」という日本語の「批判」に近い意味で用いられるのは、「批評」という言葉である。つまり、『大漢和辞典』によれば「批判」とは、批判の対象となる事物に手で触れてみて(実際に触れることの可否は別にして)、その全体をわかった上で、さらにそれをよりよくするために改めるということである。ただ、「宰相が臣下の奏状に意見を加へること」とあるように、「批判」の意味には、下の者・弱い者が上の者・強い者から一方的に欠点を指摘されるニュアンスがあるが、批判の目的はよりよいものを目指すことにあると考えてよいだろう。

以上をまとめると、「批判」は、辞書的には、事物の良い点・悪い点を決めて価値を定めること、事物の全体を理解して意見を加え改善することであり、学術(哲学)的には、事物の内容や真偽基準を吟味して事物の全体像を明らかにし、そこからよりよいものを選び抜くことであると言える。

「批判」という言葉はどのように用いられているか

では、「批判」という言葉は、それぞれの学問領域において、どのように用いられているのだろうか。まず、看護学において「批判」がどのように用いられているかを概観する。次に、看護研究の能力を身につける過程、すなわち看護研究に関する教育の過程で論文クリティークが重要であるということから、教育学やその隣接領域ではどのように用いられているかを見る。最後に、哲学における「批判」の概念について触れてみたい。

1. 看護・看護学における「批判」

看護学の事典には「批判 (critique)」の項目はなく、「批判」そのものについて論じた論文も検索した範囲内では見当たらなかった。^{注1}ところが、「クリティカル・シンキング (以下、CTとする)」をキーワードにしてWebcat Plusで検索してみると、タイトルに「看護」とCTがある和書は9冊、CTだけでは16冊の和書が確認できた。国内の論文に関しては、医中誌Webで、ここ5年間に49件、10年間では61件が検索された。CT論文の多くは、基礎教育課程あるいは臨地実習における、学生の「クリティカル・シンキング」の評価と、その能力促進の方法をテーマにしていた。このことから、看護学においても「クリティカルな」思考についての研究が行われ、実践が試みられていることが推測できる。

では、それらの文献の中では「クリティカル」はどのように定義され、「批判」という言葉はどのように用いられているだろうか。CTをテーマに取り上げた研究論文の中には、用語の操作上の定義としてCTに関する記述を引用しているものもあるが、「クリティカル」あるいは「批判」そのものを定義している論文は見当たらなかった。

次に看護学の教科書をみると、Miller and Babcockは『看護に生かすクリティカルシンキング』の中で「批判的」を以下のように定義している。

Criticalという語はギリシャ語の批判者を意味するKritikosに由来する。“批判的”であるということは、疑問をもち、理解し、分析することである。[...]批判的とはしばしば、否定的で破壊的な意味合いで考えられる。しかしながら、この言葉が思考を説明するために用いられる場合は、自身の思考や他者の思考に挑戦する積極的な過程を意味するのである。(2002: p.7)

この記述から読み取れることは、「批判的」とは、批判の対象の良し悪しや真偽に関して疑問を持ち、その内容を十分に理解して分析し、結論を下す一連の過程を意味する、ということである。別の教科書では「クリティカル」の定義はなく、CTについても「推論」の同義語であると述べているだけであり、CTの定義

は非常にたくさんあるので、定義するよりも説明する方がよいとして、それができる人の特性や、科学の原理との類似点などを列挙している (Alfaro-LeFevre, 1996: pp.9-15)。

看護系の学術雑誌にもCTをテーマにした解説・総説が掲載されており、特集が組まれていることもある (黒田, 1996; 藤崎, 2000; 操, 2000; Alfaro-LeFevre, 2002; Johnston, 2002; 正木, 2002; 野地, 2002; Petrini, 2002)。また、先に述べたように看護研究の教科書には必ず研究評価の章があり、そこでは論文クリティークに関して説明がなされ、「批判」の概念についても若干触られている。^{注2}それらをまとめると次のように言うことができる。元来、「批判」とは「よいものを判断する」ための基準であることを意味したのであり、看護研究の「批判」は、その研究の欠点を指摘するために行うのではない。研究の批判とは、研究の長所や限界、意味、有効性を判断するために、研究をあらゆる側面から吟味することである。このように「批判」の概念や論文クリティークの理念に触れられてはいるものの、さらに議論を深めている文献は見当たらない。

2. 教育学における「批判」

看護学の領域でCTが取り上げられるのは、実践の場に取り入れてよいかどうかという研究論文の価値を定めるために、批判的な思考が有用であると考えられているからである。そのため、「批判」の定義よりもむしろ、論文クリティークの手順や評価基準を習得することに主眼が置かれ、CTは一種のツールとして捉えられている印象すら受ける。

一方、教育学においてCTが重視されるのは、1980年代末から「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」を基礎として、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探究し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」を育成する必要性が重視されてきているからである (道田, 2000)。米国においては、1970年代から批判的思考の教授が教育目標とされてきたが、批判的思考の概念が定着したのは1940年代以降であり、それ以前か

ら John Dewey によって critical thinking の用語が取り上げられていた (樋口, 1997; 1999)。したがって、教育学においては思考力そのものを身につけることに主眼が置かれ、身につけさせようとしている思考力がいかなるものなのかが問題となる。つまり、批判的思考の「批判的」という概念を明確にすることが重要になってくる。

MAGAZINEPLUS (日外アソシエーツ) によれば、教育学ならびに教育心理学の領域では、批判的思考の教授に関する研究が数多くなされている。それらの研究に頻繁に引用されているのが、Richard Paul や Robert H. Ennis による critical thinking の定義である。樋口 (1997) によれば、Paul は人間の精神構造を 1) 論理的に思考し判断する際に用いられる技能、2) 個々の技能を包括的かつ総合的に用いる能力、3) これらの技能や能力を用いて合理的な判断を行おうとする姿勢やその基準となる信念や価値観、の 3 つに分け、これらが統合されたものが批判的思考であると定義した。また道田 (2001) によると、Ennis は批判的思考を「何を信じ何を行うかの決定に焦点を当てた、合理的で省察的な思考」と定義しているが、この定義が現在最も受け入れられていると思われると述べている。そして道田 (2001) は、自らも「批判的思考」ならびに「批判的」について以下のように定義している。

批判的思考とは、「批判的な態度 (懐疑) によって解発 (リリース) され、創造的思考や領域固有の知識によってサポートされる論理的・合理的な思考」と考えられる。[...] 「批判的」とは、自分や他人のものの見方・考え方を無反省かつ短絡的に受け入れるのではなく、自覚的に吟味することであり、「自分の思考の意識化」である。

教育学における批判的思考に関する研究を概観して見えてきたことは、「批判的」という概念が、論理的・包括的・総合的・省察的・創造的・合理的といった概念を包含するような、非常に広い概念であるということである。しかし、このような言葉で表される精神機能を働かせるには、道田が言うように自らの思考を意識化し、思考するものとしての自分自身に対して自覚的でなければならないだろう。

3. 哲学における「批判」—— Kant の理性批判 ——

哲学における「批判」に否定的な意味はなく、それは事物を成り立たせている根拠を調べてよいものを選び出すことであり、Kant の理性批判以後、この概念が哲学において大きな意義を有するようになったと述べた。そこで、Kant における「批判」の概念についてごく簡単に触れてみたい。

Kant は、自らの能力の範囲を超えた理性に基づく形而上学は学として成り立たず、本来の学として形而上学を成立させるためには、まず理性の能力の範囲を限定しなければならないと考えた。そうして書かれたのが『純粋理性批判』であり、執筆に着手した理由を第一版序文の中で以下のように述べている。

理性のあらゆる任務のうちでもっとも困難なわざであるところの自己認識に新たに着手し、そのために一つの法廷を設けよ、という理性に対する要請なのである。即ちこの法廷は、理性の要求が正当であれば理性を安固にし、これに反して根拠のない不当な要求は、これを強権の命令によってではなく、理性の永久不変な法則によって棄却し得るのである。そしてこの法廷こそ純粋理性批判そのものにほかならない。(1961: pp.15-16)

つまり、理性の要求することが正当か不当かを判断し、その認識が及ぶ範囲を限定するという営みは、理性の永久不変な法則に則って為されるが、それはあたかも原告と被告双方の主張を法に則って裁判官が判断する法廷のようなものであり、この法廷こそが「純粋理性批判」だということである。そして、「批判」については次のように述べている。

私がここに言うところの批判は、書物や体系の批判ではなくて、[...] 理性能力一般を批判することである。従ってまたこの批判は、形而上学一般の可能性もしくは不可能の決定、この学の源泉、範囲および限界の規定ということにもなるが、しかしこれらのことはいずれも原理に基づいてなされるのである。(1961: p.16)

Kant における「批判」とは、人間理性によって認識可能なものと不可能なものを見定め、理性による認

識の範囲と限界を明らかにすることであるが、それは永久不変な法則や原理に基づいて行われるのである。このことを石川は「理性批判の法廷モデル」(1995: p.72)と呼ぶ。石川によれば、形而上学の学としての成立可能性を突き詰めていくと、結果的に理性は二律背反に遭遇してしまうが、同一のテーマをめぐる、相反する二つの主張が同程度の根拠をもって対立するのは、法的な係争と同じ事態であると言う。そして、法廷モデルは予断を排した公平な立場を開き、対立を超えた第三者の立場を築く(1995: pp.72-74)。普通、対立というのは一方から他方への非難であるが、Kantの「批判」は自分を是、相手を非とする対立ではなく、双方を疑いの中において公平に吟味を加え、最後に第三者の立場からよりよい判決を下す試みなのである。

しかし、ここであることに気づく。Kantにおける「批判」は、理性のア・プリオリな認識が成立する範囲を限定することであると述べたが、批判する理性は同時に批判の対象となる理性でもあるということである。理性が理性自身の能力の範囲と限界を規定するという事態は、理論の上では理性の分裂を招くが、ひとつの理性が批判する理性と批判される理性に分裂し対立関係のままでいることはあり得ない。人間理性は両者が統合された状態にあるのだから、批判する理性もまた批判を受けているということが言えるのではないだろうか。つまり、批判する理性が是とする主張の根拠をもって、批判される理性の主張が是か非かということを決めるのではなく、批判する理性の主張そのものも普遍的な原理によって吟味されるということである。そして、批判する理性の主張も批判される理性の主張も公平に吟味した上で、よりよいものを選び抜き、両者を統合し、あるいは両者を超えたところに新たなものを創造する営みが、Kantの言う「法廷」なのではないだろうか。さらに、批判する理性そのものを吟味するということは、理性が理性自身に対して自覚的でなければならない。このことが、Kantの理性批判が「理性の自己認識」と言われる所以である。

「批判」とは何か

本稿では、評価基準をチェックリストのように用いて研究論文の価値を判断することが、論文クリティクなのだろうかという疑問に発し、「批判」という言葉に注目して、その概念を明らかにすることを試みてきた。その結果、「批判」の辞書意味、看護学や教育学、哲学における「批判」の概念が明らかになった。それらは以下のようにまとめられる。

日常生活の中で「批判」という言葉は、対象の欠点を指摘したり非難したりといった否定的な意味で用いられることがほとんどである。しかし、「批判」の本来的な意味は、対象となる事物の良い点・悪い点をどちらか一方に偏ることなく見極め、あらゆる側面から事物全体を理解して、よりよいものを選び抜くことなのである。良い点・悪い点を見極めるためには、事柄の是非を知り、それを峻別するための基準ないし規準を吟味し明確にしておかなければならない。その意味では、看護研究の教科書に説明されている評価のガイドラインは必要であろう。また、事物をあらゆる側面から理解するには、批判の対象となる事物のみならず、事物を取り巻く事象に関しても広い知識を有していなければならない。

そして、批判する者が批判される事物と対峙し、事物の真価を見極め、それを理解し、多から一を選び抜くような営みには、それにふさわしい厳しさが求められる。その厳しさとは、批判する者自身に向けられる厳しさである。つまり、批判する者にとっての判断基準である価値観そのものが問われるのであり、その問いは自らに向かって投げかけられるものであるが故に、批判する者は自らの思考に対して自覚的にならねばならない。

「批判」とは、単に既存の枠組みを当てはめて対象の是非を判定することではない。対象の良い点・悪い点を見極め、それ全体を理解して、よりよいものを選び抜くことは、根底に自らの思考に対する自覚がなければ行い得ない。また、自らの思考に自覚的になることによって初めて、批判する者自身の思考が鍛えられ洗練されていくのである。「批判」がこのような営みになってこそ、「批判」の本来的な意味を実現できると考える。

おわりに

ミネルバの梟が黄昏に飛翔した後、久しく時を経て、ホメロスの世界に熱い想いを馳せた人々が、ヘレニズム文化の中心地アレキサンドリアに蒐集されたギリシア語文献を正確に読もうと考えた。そのとき、すでに読み方すら忘れられようとしたテキストは果たして本物なのだろうか、そして、本物だとすればどのように読めばよいのかという疑問が生じたのである。その問いに答えるために生じたのがテキスト・クリティークである。そこから、文法学、考証学、いわゆる広い意味での文献学フィロロジーが生まれた。このように、クリティークとは、目の前のテキストが本物であるかを見極める力、そしてそのテキストを読むことが自分にとって意味があることなのかを判断する力なのである。

以上の論考から、論文を批判することの意味を知ることができた。極論すれば、クリティークとは、**書かれたものを書かれたものとして正しく読み解き、読み手である自分にとっての意味を判断する態度**ということになる。今後は、本稿により導き出した「批判」の概念をもとに、「論文クリティーク」の理念をさらに考察し、「論文クリティーク」の具体的な方法の提示を試みたい。

注

1. 閲覧可能な看護学事典（日本語と英語）には、「批判（critique）」という項目はなかった。ただし、『看護大事典』（医学書院）と『看護学学習事典』（学習研究社）には「クリティカルシンキング」の項があり、「クリティカルシンキング critical thinking クリティカルシンキングの定義は批評的な思考能力・問題解決能力・創造的思考・意思決定能力などさまざまである」（『看護大事典』）、「クリティカルシンキング〔critical thinking〕看護過程を適切にするためのクリティカルな思考を意味し、知的・対人関係的・技術的な技能を使用して行われる思考の方法である」（『看護学学習事典』）と説明されている。しかし、critiqueの形容詞であるcriticalについては、「批評的」という別な言葉で言い換えるか、「クリティカルな」とカタカナ表記して

いることから、これは一種の同語反復の説明であって、「批判的」そのものの意味を説明したものではない。
2. 具体的には以下のような記述が見られた。

「看護研究の批判的評価の機能は、あら捜しをしたり誤りを暴いたりすることではない。」（Polit and Hungler, 1999, p.625）「日常的には、批判という言葉は否定的な意味で用いられる。批判することとは、『非難すること、叱責すること、けなすこと、けちをつけること、あらを探すこと』なのである。しかし、特に文学や芸術、学術用語では、批判はまったく異なった意味を帯びる。すなわち批判は、分析や論評、慎重な吟味、評価、あるいは長所の判断と関連する。[...]実際、アリストテレスによって最初に用いられた批判という言葉は、『よいものを判断する』ための基準であることを意味した。」（Wilson, 1989, p.177）「研究論文の知的な批判には、研究のあらゆる側面に関する注意深い吟味が伴う。それは、研究の長所や限界、意味、有効性を判断するために、先行研究の経験と知識に基づいて行われる。」（Burns and Grove, 1997, p.653）

文 献

- Alfaro-LeFevre R (1995)／江本愛子監訳(1996)：アルファロ 看護場面のクリティカルシンキング。医学書院、東京。
- Alfaro-LeFevre R (2002)：批判的思考を取り入れた新しい看護モデル。エキスパートナース、18（5）：102-113。
- Burns N and Grove SK (1997)：The Practice of Nursing Research. Conduct, Critique, & Utilization (3rd ed.). W. B. Saunders Company, Philadelphia.
- 江藤裕之（2005）：看護・ことば・コンセプト。文光堂、東京。
- 藤崎郁（2000）：サブストラクションの原理と実際。サブストラクションを自分のものにするために。看護研究、33（5）：13-23。
- 樋口直宏（1999）：J. デューイにおける「批判的思考」の概念—“How We Think”を中心に—。教育方法学研究、13：49-68。

- 樋口直宏 (1997): 批判的思考教授における思考技能の統合— R. ポールの理論を中心に—, *教育方法学研究*, 23:39-47.
- 石川文康 (1995): *カント入門*. ちくま新書, 東京.
- Johnston L (2002)/外崎明子監訳 (2002): リサーチ・クリティーク. 研究をどう評価するか. *看護研究*, 35(2): 21-26.
- Kant I (1787)/篠田英雄訳 (1961): *純粹理性批判* (上). 岩波文庫, 東京.
- 黒田裕子 (1996): 看護研究を科学的な視点でクリティークしよう. その1. *月刊ナーシング*, 16(4): 116-120.
- 正木みどり (2002): 隣地実習とクリティカルシンキング. *看護教育*, 43(11): 961-965.
- Miller MA and Babcock DE (1996)/深谷計子, 羽山由美子監訳 (2002): *看護にいかすクリティカルシンキング*. 医学書院, 東京.
- 道田泰司 (2001): 批判的思考の諸概念—人はそれを何だと考えているか—. *琉球大学教育学部紀要*, 59: 109-127.
- 道田泰司 (2000): 大学は学生に批判的思考力を育成しているか?—米国における研究の展望—. *琉球大学教育学部紀要*, 56:369-378.
- 操華子 (2000): クリティークから統合への道すじ—低体温と創傷感染に関する研究論文のサブストラクションをととして—. *看護研究*, 33(5): 59-70.
- 野地有子 (2002): クリティカルシンキングと教育方法. *看護教育*, 43(11): 918-925.
- Petrini MA (2002): 看護教育と臨床実践の両場面における, 科学的探究・批判的思考の活用. *Quality Nursing*, 8(6): 29-40.
- Polit DF and Hungler BP (1999): *Nursing Research. Principles and Methods* (6th ed.). J. B. Lippincott Company, Philadelphia.
- Wilson HS (1989): *Research in Nursing* (2nd ed.). Addison-Wesley Publishing Company, California.
- Woods NF and Catanzaro M (1988): *Nursing Research. Theory and Practice*. The C. V. Mosby Company, Missouri.

【Summary】

What Is "Being Critical" in Research?

Tomoko MIZUSAKI¹⁾, Hiroyuki ETO¹⁾

¹⁾ Nagano College of Nursing

The present paper tries to examine the meaning of "critique" or of "being critical" in terms of "research critique" in nursing and nursing education. First, we overview major nursing text books regarding their evaluation of research papers and their description of how to read papers critically. Then, we raise a question in relation to the manner of "research critique" in order to object to the evaluation solely by checklists. Moreover, we clarify the meaning of "critique" in dictionaries, its usage in nursing education, and its definition in pedagogy and philosophy. As a consequence, we define "critique" as an attitude to understand objects as a whole from every aspect and select things good and useful instead of finding nothing but their faults.

Key words: research critique, critique, nursing research, evaluation of research papers

水寄知子 (みずさきともこ),
江藤裕之 (えとうひろゆき)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
0265-81-5138 (Fax 兼)
TOMOKO Mizusaki, Hiroyuki ETO
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
E-mail: mizusaki@nagano-nurs.ac.jp,
heto@nagano-nurs.ac.jp